里山学研究センターのプロジェクト紹介

# 里山の食とエネルギー

## ―「資源と産業」研究班での研究計画―

龍谷大学理工学部教授　里山学研究センター副センター長
宮浦　富保

森林や水田、耕作地などは琵琶湖水域圏の環境を形作っている。特に、森林や耕作地などから流れ出す水は、琵琶湖をはじめとする水界生態系に直接的に影響していると考えられる。「資源と産業」研究班は、「森林資源とエネルギー利用」と「エコロジー的な食と農」の２つの研究ユニットからなっており、琵琶湖水域圏で行われている農業や林業などの産業を対象として研究を進める予定である。人による利用の強度と質により、それらの生態系がどのように変化し、またその変化が琵琶湖水域圏の環境にどのように影響するのかを明らかにすることが目的である。それと同時に、森や耕作地などから得られる資源について、その持続可能な利用のあり方を考究する。それらの資源利用に関わる歴史と文化についても研究を行う予定である。

「森林資源とエネルギー利用」研究ユニットでは、主に森林資源の持続可能な管理と利用をテーマとしている。木質資源のバイオマスやエネルギーについて、特に人の手の入った生態系における生産のメカニズムを明らかにするとともに、燃料資源としての利用技術について研究を深める。また、持続可能な森林管理や資源の流通、消費についての技術的、政策的な課題を明らかにする。これらの科学的知見をベースとして、「総合研究班」と共同して、地域における持続可能な再生可能エネルギーの利用について具体的な可能性を検討するとともに、経済的・法学的制度論としての森林管理、林業政策の研究を行い、今後の方針を提案する。さらに、森林の利活用の技術的方策の検討と、環境教育プログラム開発のため、炭焼き活動の提案のための研究を行う。

「エコロジー的な食と農」研究ユニットは、環境保全型農業および新しい農業政策の研究および地域独自の「食」の研究を行い、地域における持続可能な生産と消費の構造を考究するとともに、食農文化の継承と創造および農業景観保全について政策提言するための研究を行う。具体的には、食文化と農業景観の調査・マッピングを行い、相互の関連性を研究するとともに、地域独自の「農」と「食」の保全と、農業と食の循環における里山食文化の価値醸成とその継承について、主に経済的観点から研究を行う。こうした環境配慮型の農業を保全するため、過疎地を含む実際の農村の実情や農業政策について経済学および法律学のみならず、ジェンダー視点からも多角的に分析を行う。